

# 超域研究機構第1期プロジェクト 研究成果（中間）報告書— 概要 —

## 1. 研究プロジェクト名

「19世紀学研究——ヘレニズムから見た変革と教養の世紀——」  
(平成19年より改称)

## 2. 研究プロジェクト構成員職・氏名

*代表者：人文社会・教育科学系（大学院現代社会文化研究科）教授	鈴木 佳秀
**代表者：人文社会・教育科学系（人文学部）教授（当時）	山内 志朗
分担者：超域研究機構准教授	筒井 賢治
分担者：超域研究機構准教授（平成19年度から）	源河 達史
（*平成18年度から **平成17年度のみ）	
平成19年度以降：	
分担者：人文社会・教育科学系教授	生田孝至
人文社会・教育科学系教授	菅原陽心
人文社会・教育科学系教授	中村哲也
人文社会・教育科学系教授	松本彰
人文社会・教育科学系教授	佐々木充
人文社会・教育科学系教授	桑原聡
19世紀学研究所助教	森田直子

## 3. 研究成果の概要

### (1) プロジェクトにおいて目標としたもの

本プロジェクトは、当初、「多元性社会の原型としてのヘレニズム」という課題名を掲げて発足した。それは、アテーナイをはじめとする古典ギリシア時代の都市国家が政治的に没落し、代わりにアレクサンドロス大王の帝国、さらにはローマ帝国が出現してくるヘレニズム時代を研究することが、同じ「グローバル化」現象に見舞われている現代の諸問題ともつながってくるという確信に基づくものであった。

この確信は今なお変わっていないが、その後、ヘレニズム研究だけでは「間口」が狭く、多くの研究者が参入することは期待できないこと、また同時期に行われていた日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「教養教育の再構築」（～平成19年度）のプロジェクト・リーダーを本プロジェクトの代表者である鈴木佳秀教授が務めており、そこで培われた問題意識および貴重な人脈を活かしたいこと等々の考慮から、研究目標を一回り拡大し、「19世紀

学」という、類例のない斬新なコンセプトを打ち出すこととなった。

単に「19世紀」でなく「19世紀学」とするのは、19世紀という時代を研究対象とするのではなく、19世紀に基盤が整った諸「学」を総合的に研究するという意味である。理科系・工学系の分野もそこに含まれている。ヘレニズム研究もまた、まさに「ヘレニズム」という歴史学用語が19世紀の西洋古代史学者ドロイゼンの創案であるという点から、19世紀学の一部として位置づけることができるのである。

## (2) 目標に到達するために選択した方法・手段

前項で述べたような変化と対応して、「19世紀学」を推進するための組織が相次いで立ち上げられた。まず平成18年12月に「19世紀学学会」が設立され、そして翌平成19年3月には新潟大学人文社会・教育科学系附置のコア・ステーション「19世紀学研究所」（正式名称は英語名の *Institute for the Study of the 19th Century Scholarship*）が活動を開始した。「研究所」はすでに国際シンポジウムを2回、その他の催しを複数回主催している。さらに学会誌として「19世紀学研究」が「学会」「研究所」の両方を編集発行元として創刊され、第1号が平成20年3月に発行された。

こうして、現在、超域研究機構の当プロジェクトは、「学会」「研究所」と共に19世紀学研究を支える3本柱の1つという位置を占めることになっている。平成19年7月には、「研究所」の主催、「学会」の共催による「第1回講演会」（於新潟大学）において当プロジェクト専任の筒井が「新発見『ユダの福音書』をめぐる」、源河が「リエージュ写本 UBL230 における Ivo von Chartres の『序文』について」という講演を行った。

## (3) これまでの研究で得られた成果

当プロジェクトに限らず、いわゆる文化系の研究は到達度を明確に示すような指標が存在しない場合が多い。が、前項に記したように「ヘレニズム研究」という狭い枠を脱して「19世紀学研究」という新たな領域を開拓し、「学会」および「研究所」と連携しながら多くの催しを成功させ、また学会誌を立ち上げたということは、2～3年という短い期間でということを考慮するならば、十分な成果として評価できるのではないかと思われる。もっとも、これは土台作りのレベルであるから、これまでの成果を活かすも殺すも、これからの活動次第であることは言うまでもない。

今までの研究で特筆すべき成果は、従来考えられていたのとは異なり、19世紀及び19世紀学の「学際性」と「多様性」である。19世紀及び19世紀学は得てして第二次世界大戦へと収束するパースペクティブからのみ評価されてきた

が、われわれの研究によって 19 世紀及び 19 世紀学が実は豊かな可能性をもっていた世紀であることが解明されつつある。

特筆すべき第二の点は、19 世紀学研究が新潟大学を出発点として国際的研究へと発展しつつあることである。ドイツのビーレフェルト大学また、学術交流協定をもつフランスボルドー第 3 大学との共同研究が始まり、平成 19 年度には両大学から研究者を招きシンポジウムを開催した。(イタリアローマ大学からも研究者を招いた。)本年もまた 10 月に両大学から研究者を招聘する予定である。

また、先に触れたことであるが、19 世紀学研究所・学会の機関誌「19 世紀学研究」を平成 20 年 3 月に発刊した。第 2 号は、平成 20 年 10 月、第 3 号は平成 21 年 3 月に発刊予定である。言うまでもなく、すべての論文は査読を行っており、また欧文原稿を積極的に採択している。

#### (4) 更新する期間で目標とする事項及びその研究計画

更新する期間内に COE ないしはそれに匹敵する、国際的教育研究拠点を構築することが目的である。そのために 19 世紀に関する、様々なテーマでシンポジウム等を開催し、上に触れた 19 世紀学の「学際性」と「多様性」を検証してゆく。以下に平成 20 年度の予定を記載する。平成 21 年度以降は順次決定してゆく。

平成 20 年度：

5 月 24 日：シンポジウム：「19 世紀学とは何かー19 世紀学研究の可能性」

講演者：

松本彰（新潟大学人文学部）

廣田功（新潟大学経済学部）

野崎真澄（新潟大学理学部）

曾田長人（聖学院大学）

金山亮太（新潟大学人文学部）

後藤康志（新潟医療福祉大学）

木部美知子（新潟医療福祉大学）

8 月 25 日：講演会

講演者：

Dr. Thomas Schwarz (Visiting Lecturer in New Delhi, India)

講演題目：Hybridity. A Critical Conceptual History.

9 月 7 日：シンポジウム：「いまさらヨーロッパ」ーARS（技術、芸術、科学）

の分化と「近代」－

講演者：

川田順造（東京外国語大学名誉教授）

松本彰（新潟大学）

陣内秀信（法政大学）

坂内徳明（一橋大学）

村上陽一郎（国際基督教大学）

10月4・5日：国際シンポジウム：「The Revaluation of the 19<sup>th</sup> Century – Possibilities of the Century」

講演者：

Prof. Eric Benoit（ボルドー第3大学）

Prof. Dominique Jarasse（ボルドー第3大学）

Prof. Wolfgang Braungart（ビーレフェルト大学）

Prof. Joachim Radkau（ビーレフェルト大学）

臼井隆一郎（東京大学）

大角欣矢（東京芸術大学）

佐々木充（新潟大学）

橋本一径（学振研究員）

廣田功（新潟大学）

10月29日：講演会

講演会：Rein Raud 教授（エストニア大学学長）：「近代化の概念について」

1月12日：シンポジウム：「多元性社会の原型としてのヘレニズム」

講演者：

葛西康徳（大妻女子大学）

松本英実（新潟大学）

筒井賢治（超域研究機構）

源河達史（超域研究機構）

鈴木佳秀（新潟大学大学院現社研）

**(5) 研究発表実績**（超域研究機構所属教員のみ。詳細は下を参照。）

ア 学会誌等 計4編

イ 口頭発表 計4回

ウ 出版物 計 冊（下記参照）

(6) 研究成果による知的財産権の出願・取得状況

なし

(7) 新聞等のメディアに掲載された事項

19 世紀学学会、19 世紀学研究所の催しについては随時日報で紹介。

超域研究機構第1期プロジェクト  
研究成果（中間）報告書— 詳細（筒井賢治） —

1. 研究プロジェクト名

「19世紀学研究——ヘレニズムから見た変革と教養の世紀——」

2. 研究プロジェクト構成員職・氏名

概要を参照。

3. 研究成果の概要

- (1) プロジェクトにおいて目標としたもの
- (2) 目標に到達するために選択した方法・手段
- (3) これまでの研究で得られた成果

当初の研究プロジェクト「多元性社会の原型としてのヘレニズム」は、次の3点を専任教員に求めていた。

1. 古代ヘレニズムに関わる研究とその公表
2. 上記研究成果の国際的場面での発表
3. 本研究プロジェクト内部での連絡及び、成果の取りまとめ

プロジェクト名が「19世紀学研究」に変更されても、2と3の課題には変更がないと考えられる。2については、超域研究機構や19世紀学研究所・学会の催しではないが、スイス・ジュネーブで口頭発表を行っている。下記(5)イを参照（冊子体の報告集も近いうちに公刊されると思われる）。3について、特にここで触れる必要はないであろう。

1については、同じテーマを扱いつつも、まさに19世紀学にそのディシプリンが確立した関連諸学（古典文献学、宗教史学等々）の方法論とそれへの反省をつねに意識の中にとどめるという態度が要求されるものと理解している。

さて、もっとも専門的な研究課題は、紀元4世紀のキリスト教反異端文書である通称『アダマンティオスの対話』（ギリシア語）の本文校訂であるが、関連必須資料（とりわけ同時代諸文献の新しい校訂本）の収集が進まないなどの理由で、残念ながらあまり進展していない。が、この作業は19世紀に始まった古代キリスト教文書集成である *Griechische Christliche Schriftsteller* に含まれている『アダマンティオスの対話』校訂本（van de Bakhuyzen, 1901年）を批判的に乗り越えようとするという点で19世紀学とも間接的には関連してくるので、仮に本文校訂という形でなくとも、19世紀学の枠内でとりあげる機会があるだろうと考えている。

これまでの期間で中心的に取り組んできた研究課題は、平成 18 年に突然その存在が発表されたグノーシス主義古代キリスト教（異端）文書『ユダの福音書』（コプト語、ただし明らかにギリシア語からの翻訳）であった。それまで私は同種の文書集である「ナグ・ハマディ文書」（コプト語）の日本語訳出版（岩波書店）に参加しており、また一般向けのグノーシス主義解説書を出版（講談社）していたこともあって、突如としてその論評と研究のブームに巻き込まれることとなった。次項に挙げる研究成果の約半分は、そこから生まれたものである。

ただ、現在までの『ユダの福音書』研究は、どちらかというところとコマーシャリズムに載せられた一過性のブームという感が強かった。ようやく 1 年ほど前に最初の校訂本が出されたが、この種の文書は複数の校訂本（校訂案）が出てからが研究の本番というのが常識的である。ごく最近になって、この校訂本に対する批判的な論評がでてきたり、また『ユダの福音書』を直接にとりあげる最初の国際シンポジウムの記録集（論文集）が公刊された。この研究テーマは、「グノーシス主義」とは何かという問題とも絡んでおり、まさに「グノーシス主義」という古代キリスト教研究におけるテクニカルタームを生み出したのが 19 世紀であることから（F. C. Baur）、19 世紀学研究という枠内においても、引き続き、積極的にこのテーマに取り組みたい。

#### （４）更新する期間で目標とする事項及びその研究計画

上記（３）と重複するので、ここでは箇条書きで要点を挙げるにとどめる。

- ・ 『アダマンティオスの対話』校訂を 19 世紀学研究の枠内で再考すること。
- ・ 『ユダの福音書』研究、およびそれを通して 19 世紀に形成された五大キリスト教研究・グノーシス主義研究との批判的な対話。

#### （５）研究発表実績

##### ア 学会誌等

筒井賢治「グノーシス主義的諸体系における「魂」の位置づけについて」、東京大学教養学部 21 世紀 COE「共生のための国際哲学センター」UTCP 研究論集 4、2006 年、75-76.

筒井賢治『『ユダの福音書』とは何か（前・後）』、キリスト新聞 2006 年 6 月 10 日号 3、同 17 日号 3.

筒井賢治「キリスト教グノーシスにおける「霊」と「肉」——『ペトロの黙示録』（NHC VII,3）からの考察——」、新潟大学院現代社会文化研究科・比較宗教思想研究プロジェクト「比較宗教思想研究」7、2007 年、27-45.

## イ 口頭発表

筒井賢治「新発見『ユダの福音書』をめぐって」、19世紀研究所主催（19世紀学会共催）  
第1回講演会、2007.7.27.

筒井賢治、The Gospel of Judas and Gnostic Traditions、International Conference on  
'Diffusion' of Humanities, Fondation Hardt/Geneva, Switzerland, 2007.8.30.

## ウ 出版物

聖書学用語辞典（分担執筆）、日本キリスト教団出版局、2008年3月、「グノーシス主義」  
「ナグ・ハマディ文書」「トマス福音書」「マニ教」「マンダ教」「外典黙示録」「マルキオン」  
「ムラトリ正典表」「ウァレンティノス（派）」「シモン派」「デミウルゴス」「バシレイデー  
ス（派）」「ヘラクレオン」の全13項目。

### （6）研究成果による知的財産権の出願・取得状況

なし。

### （7）新聞等のメディアに掲載された事項

上記（5）アの「キリスト新聞」の他、いくつか短い書評や論考を一般誌／紙  
に寄稿。詳細は大学公式HPの研究者総覧を参照。



超域研究機構第1期プロジェクト  
研究成果（中間）報告書— 詳細（源河達史） —

1. 研究プロジェクト名

「19世紀学研究——ヘレニズムから見た変革と教養の世紀——」

2. 研究プロジェクト構成員職・氏名

概要を参照。

3. 研究成果の概要

- (1) プロジェクトにおいて目標としたもの
- (2) 目標に到達するために選択した方法・手段
- (3) これまでの研究で得られた成果

2007年4月1日に採用されるにあたり提案した研究課題は、一言で要約すれば、「テキスト批判の理論と実践」であった。「理論」においては、近代的テキスト批判理論「ラッハマン原則」が確立する19世紀初頭までの学問史を、グラーツィアーヌス教令集の校訂史を例に、思想史として再構成すること、「実践」においては、実際にテキストを批判する営みの中で近代的テキスト批判理論を反省すること、をそれぞれ考えていた。

まず「理論」について。16世紀から19世紀の間、グラーツィアーヌス教令集の校訂は幾度も行われた。その際特徴的なことは、1582年のローマ版をもってカトリックの校訂活動は終わりを告げ、それ以降グラーツィアーヌス教令集の校訂は専らプロテスタントの手で行われたこと、である。この1年余の活動においては、プロテスタントの手になる最も重要な校訂版の一つ、18世紀の教会法学者 H.I. ベーマーの手になる校訂版（通称ベーマー版）を対象を限定し、

「ローマ版があるにも関わらずベーマーがグラーツィアーヌス教令集の校訂に向かったのは何故か」

「ベーマーの教会法学の中にグラーツィアーヌス教令集の校訂へと向かう契機が見出されるか」

という問題設定のもと、まず、ベーマー版の詳細な検討に着手した。その際、一方においてベーマーの校訂方針をベーマー自身の著作から明らかにすること、他方においてベーマー版をローマ版と比較することによりベーマーの校訂作業を具体的に明らかにすること、を試みた。前者は、ベーマーが引用した文献をも調べ、ベーマーの立脚する知的伝統を明らかにする作業をも含むものであり、後者は、カトリックの校訂版（ローマ版）との比較において「プロテスタント的」な側面がベーマー版に見られるかどうかを考察するもので

ある。これらの作業は現在継続中である。残りの期間において、ベーマーが生きた時代の学問水準からくる要請や宗教的問題にも視野を広げ、「テキストの批判」をめぐる思想史としてまとめたい。

「実践」に関しては、グラーツィアーヌス教令集に関わる史料について、この1年余の間に若干の成果を上げることができた。まず、グラーツィアーヌス教令集以前の教会法における最も重要な理論的著作シャルトルのイヴの『序文』について、リエージュ大学図書館所蔵の写本 BUL230 を対象とし、19世紀学研究所講演会（新潟大学、2007年7月30日）ならびにフィロロギカ研究会（大妻女子大学、2007年10月13日）にて報告を行い、その成果を Hermann Nehlsen 教授の古希祝賀論文集に寄せた。また、新潟大学若手奨励研究費をも受けた、グラーツィアーヌス教令集の注釈書 Summa “Permissio quedam” の研究について、第13回国際中世教会法学会（13<sup>th</sup> International Congress of Medieval Canon Law, 4-9, August 2008, Budapest/Esztergom）にて報告を行った（“Zur Summa “Permissio quedam” zum Decretum Gratiani”）。この段階での成果は Peter Landau 教授の古希祝賀論文集に寄せた。Summa “Permissio quedam” については、さらに研究を進め、2009年1月12日に行われる19世紀学会シンポジウム（新潟）ならびに7月10-14日に開催される Leeds International Medieval Congress（イギリス）にて順次報告し、その成果を学術誌（予定としては Savigny Zeitschrift）に投稿する。また、残りの任期で校訂版の完成を目指し、教会法史料のシリーズ Monumenta Iuris Canonici から公刊する予定である。

## 2. 詳細

(1) 研究プロジェクト名：19世紀学研究—ヘレニズムから見た変革と教養の世紀

(2) 研究プロジェクト構成員職・氏名：准教授・源河達史

(3) 研究成果の概要

①目標：理論的検討と実践の双方から、近代的テキスト批判理論を反省する

②方法・手段：「理論」においてはグラーツィアーヌス教令集の校訂史、「実践」においては主として Summa “Permissio quedam” の校訂

③これまでの研究で得られた成果：テキスト批判の「理論」に関しては、研究に着手して1年余であるが、ベーマーの校訂作業の具体像が少しずつ見えてきたと思う。来年度中には口頭報告の形で成果を公にしたい。テキスト批判の「実践」に関しては、Summa “Permissio quedam” を伝える諸写本間の関係 (Stemma codicum) を解明し、国際学会で報告できたことが大きい。これについてはさらに研究を進め、2009年1月、7月にそれぞれ報告する。

④更新する期間内での目標・計画

「理論」に関しては、ベーマー版の編纂方法を具体的に明らかにし、学会誌（ドイツ）にて発表することを目指す。「実践」に関しては、Summa “Permissio quedam” の校訂版の完成を何よりも優先する。これまでは専ら諸写本相互の関係を解明することに重点を置いてきた。残りの任期における研究の重点は、Summa “Permissio quedam” に影響を与えた諸々

の著作（同時代の他の法学文献など）を調べ、それらの与えた影響を具体的に明らかにすることにある。残念ながら校訂版のない史料がほとんどであるため、複数の写本を用いた作業となる。現在 Summa "Permissio quedam"に最も大きな影響を与えた著作の一つ Stephanus Tornacensis の Summa（写本）を調査中である。

#### ⑤研究発表実績

##### ア．論文

Tatsushi Genka, Zum Prologus des Ivo von Chartres in der Handschrift Luettich UB230, in: Festschrift fuer Hermann Nehlsen（間もなく公刊）

Tatsushi Genka, Zur Ueberlieferung der Summa „Permissio quedam“ zum Decretum Gratiani, in: Festschrift fuer Peter Landau（2009年公刊予定）

##### イ．口頭発表

源河達史「リエージュ写本 BUL230におけるシャルトルのイヴの『序文』について」19世紀学研究所講演会（2007年7月30日新潟大学）、フィロロギカ研究会（2007年10月13日大妻女子大学）

Tatsushi Genka, Zur Summa „Permissio quedam“ zum Decretum Gratiani, 13th International Congress of Medieval Canon Law, 4-9, August 2008, Budapest/Esztergom.

#### （6）研究成果による知的財産権の出願・取得状況

概要を参照。

#### （7）新聞等のメディアに掲載された事項

概要を参照。